



第9回「CAOS 21の会」参加印象記

主催者印象記

宇多重員
(CAOS 21の会 会長)

CAOS 21 (カオス 21) の会とは、Century 21 Advanced Ophthalmic Surgery の会のことで、大げさな名前であるが、眼科手術に非常に関心のある者たちの集まりである。この会の特徴は、興味ある新しい眼科医療を求めて眼科手術施設を直接訪問し、ライブ手術を見て、眼科のそして自分たちの将来を考える会である。今回のテーマは「屈折矯正手術」、特にマイクロケラトームによる「ウェットラボ」と、「LASIK 手術」見学と、Mフックを使った「PEA+IOL 手術」であった。

1日目 日本で初めてマイクロケラトームを使ったウェットラボ実施

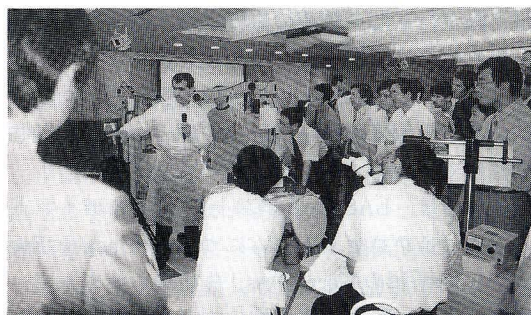
アイビーホール青学会館「シノノメの間」において、Kerry Assil 先生の指導による、モリア社マイクロケラトームを使った豚眼、及び人眼(角膜移植不適格眼使用)を使ったウェットラボに参加した。Kerry Assil 先生は、さすが米国で1、2を争うLASIKのポリウムサーजनだけあって、マイクロケラトームの持ち方からサクショニングの扱い方のコツまで、ポイントを手際良く説明しながら指導していただいた(写真)。

ウェットラボ終了後、Assil 先生の豊富なご経験の中から、注意する要点や合併症対策などビデオを使って講演していただいた。

2日目 Kerry Assil先生ご指導による LASIK 手術ライブ見学

南青山眼科クリニックにおいて、Kerry Assil 先生ご指導による坪田一男教授並びに堀好子先生の LASIK 手術のライブ見学を13例拝見する。

手術は Assil 先生の普段のやり方を坪田教授並びに堀先生に再現していただき、LASIK 手術の



ウェットラボ会場のような様子

ポイントを教えていただくことができました。

手術終了後 Assil 先生から併発症を起こさないための要点を講演していただいた。

また、今回の実習や講演では、坪田一男教授並びにビッセン宮島弘子先生に通訳をお願いした。

3日目 Mフックを見事に操られる Phaco 手術見学

羽田空港を早朝出発し、緑豊かな熊本県人吉市の「みなみ眼科」へ訪院させていただいた。みなみ眼科は、日帰り白内障手術を主体にしたクリニックで、各種映像機器を網羅して、編集室や研究棟まで設備された贅沢なクリニックであった。

当の南宣慶先生は、休日を返上して我々のために笑顔で迎え入れていただき、白内障手術を6例拝見する。さすがミナミ-Mフックの考案者だけあって、フックの使いこなしが鮮やかで、手品師のごとく核を自由自在に分割し吸引して、アッと言う間に終わる。手術終了後、研究棟の会議室で大きなスクリーンへ映し出された当日のビデオを見ながら具体的な説明を受ける。

筆を置くに当たり、今回も気持ち良く受け入れていただいた施設側の先生方に厚く感謝申し上げます。またこのユニークな会の発案・企画された細川保氏、ご協力くださった各メーカーの方々に深謝する。
(記 1998.11.18)

参加者印象記

方波見 隆史・禰津 直久・属 佑二

本邦ではエキシマレーザー、特にPRKについては厚生省の認可がまだ下りていないことや、非眼科医が行っている等の事情から、眼科医の中でもそれぞれの立場で見解の相違があるようだが、CAOS 21の会では屈折矯正手術を視野に入れ、これまで数年来大きなテーマのひとつとして勉強を続けてきた。

1日目は、LASIKを学ぶ上で重要なポイントとなるマイクロケラトームについてSinskey Eye Institute所属のKerry Assil先生をお招きして、豊富な経験に基づく最先端のやり方を教えていただくことができた。

特に印象的なことは、これ程綺麗なフラップができるのには驚きで、以前よりもLASIKに対して安心感を持つことができた。

ウェットラボ終了後の講演では、Assil先生が世界各地より集められた合併症を中心にLASIKの適応、具体的なトラブルを原因と対策に分けて教えていただいた。(方波見)

2日目は、南青山クリニックでレーシックの手術見学とアシル先生の講義であった。南青山クリニックは青山5丁目交差点からすぐの大通りに面した近代的なビルの3階と4階にある。メゾネット式の両階は吹き抜けを階段でつないでおり、従来の“医”や“病”といったやや暗いイメージが全く払拭されていたのが印象的であった。

午前には手術のライブ見学で、アシル先生の指導のもとに坪田先生、堀先生がアシル先生の方法で手術をされていた。我々は3つのグループに分かれて順番に手術室の横から見学し、残りのグループは別室のモニターで見学したが、昨日の実習の後なのでより理解しやすかった。

午後はアシル先生の講義で、内容としてはフラップの大きさを決める要因、サクシジョンリングのリーク対策、開瞼器のはずしかた、術後の観察のポイント、術前術後の患者への指示事項、ビギナー向けの患者の条件など多岐にわたる細かいレクチャーを受けることができた。(禰津)

3日目は、みなみ眼科医院訪問(1998.8.22)のため早朝、羽田空港に集合した。若い新進気鋭の南宣慶先生の診療所と白内障手術見学をする。

人吉は球磨川のほとりに位置する杉で有名な山村である。鹿児島県境、五木に囲まれ、球磨焼酎でも有名である。

南宣慶先生はMinami-Mhookを考案し、巧妙に手術をこなす若いサージャンであるが、どうしてこんな田舎でバイタリティーな先生が誕生したのかを考えると、環境が関係しているような気がしてならない。

小生は時間の関係で手術しか見学できなかったが、従業員もそれほど多くなく上手に経営しているように映った。患者の出し入れなどそつなく行われている。

診療所自体は経営が安定するにつれ計画的に増築されたようで、堅実な先生かもしれない。最新の研究棟は二階建てで、手術室、手術顕微鏡などをモニターで観ることができ、手術室からも研究室が見えるようになっているため、見学中の意見交換などが自由に行えるようになっている。

手術室は術者用椅子、ベッドなどは台座の上に置かれ、回りのスタッフが動かすことができるようになっているようで、先生自身による改良・工夫がなされており、術中の管理・操作がしやすいようになっている。

手術はすべてPEA+IOLであった。白内障手術の主流は2wayによるPEAであり、非利手はサポートする程度であるが、南先生は両手を自由に使いこなしているように思う。Hydrodissectionをせずにフックで水晶体嚢と核の分離、核の分割、核の乳化の補助、サージ防止のための後嚢のサポートと、乳化中フックは赤道部から後嚢上と嚢内を自由に動かしており、まさしく両手で手術をしているという印象であった。今回のCAOS 21はハードスケジュールであったが、充実した3日間で心地よい満足感をおぼえた。ときには若い人の手術をみるのもよいものである。(属)